

2021年度 SPIO Award

SPIO Award は、毎年 Auris Nasus Larynx (ANL) に掲載された原著論文の中より、優秀原著論文1篇に対し、その著者に賞状と賞金(50万円)を贈呈しています(ただし、筆頭著者は45歳以下)。また、受賞者には日本耳鼻咽喉科頭頸部外科学会総会・学術講演会において講演の場が与えられます。これは平成13年から始まり令和2年までに21名の受賞者を選出しました。

2021年度は、掲載された原著論文139編の中から候補対象となる91編を英文誌委員会のメンバーで審査し、最終的に SPIO Award 候補論文として4編が推薦されました。その後 SPIO 選考委員会および理事会で選考した結果、東京大学 佐野奈央氏が選ばれました。

Nao Sano: High CT values relative to the brainstem differentiate inverted papillomas from nasal polyps
ANL Vol.48, No.5, 905-913, 2021

令和2年度曾田豊二SPIO奨学金受領者(フィラデルフィアより)

旭川医科大学 原淵翔平氏

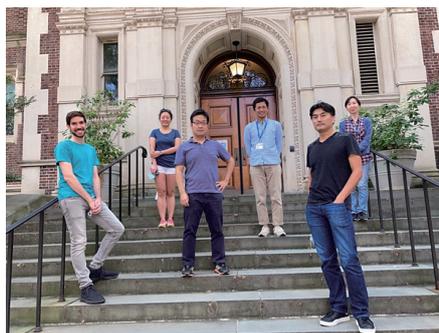
大変お世話になっております。私は2020年4月よりアメリカのペンシルベニア州フィラデルフィアにある University of Pennsylvania (ペンシルベニア大学) に留学させて頂いております。この度留学の近況報告をご依頼頂きましたので、COVID-19(新型コロナウイルス感染症)の恐慌時のアメリカの状況など交えてご報告申し上げます。

私が渡米したのはまさに COVID-19の流行が起り始めた時期でした。なんとか渡米はできたものの、渡米して1週間で米国内でもパンデミックの恐慌が起り、フィラデルフィア市もロックダウンになってしまいました。アメリカ国民の COVID-19への恐怖心は日本人以上に強く、スーパーでの食料品の買い占めが起り、公園は次々と封鎖され、市街はもちろん住宅街の外にも出歩いている人が全然いない状況でした。ペンシルベニア大学もロックダウンに合わせて封鎖されてしまい、管理負担の削減のために実験用動物の処分も行われてしまいました。封鎖されている期間は実験が行えないのはもちろん、私が渡米後にすぐに実験を開始できるように準備されていたトランスジェニックマウスたちも処分されてしまったので、研究計画に大きな遅延を組み込む事を余儀なくされてしまいました。同時期に米国に留学されていた先生方は同様の境遇に立たされていたと思いますので同情いたします。日常生活では公的機関が機能停止したために SSN(ソーシャルセキュリティナンバー)が取得できなかったことが予定外でしたが、そこはアメリカらしく各機関が柔軟な対応をしてくれたので、特にセットアップに大きな支障もなく生活をスタートすることができました。幸い近所に住んでいる日本人家庭が多かったので情報交換や内々の交流などがあり不安を感じることはありませんでした。あとは子供と散歩したりラボメンバーとオンラインで勉強会を行ったりする日々でしたが、医師として日々忙しく働いてきた中での小休憩のような期間になったとポジティブに捉えています。

2020年の春夏の時点では日本以上の恐慌状態に陥っていたアメリカでしたが、自国ワクチン開発・流通がトップレベルであったことや柔軟な政策変化により、およそ2年が経過した現在では日本に比べてかなり緊張感が緩和された状態です。我が家も長女は毎日楽しそうに pre-schoolに通い、昨年に第2子が生まれたので妻もご近所の奥様たちと交流を深めながら子育てを楽しんでおります。

研究活動は大学の規制緩和後から遅れを取り戻すようピッチを上げて行っております。PIの Kambayashi Taku 先生のご指導ご鞭撻のもと、毎日ラボメンバーたちと免疫学研究に勤しんでおり、MD/PhD コースの学生たちの熱意ある研究姿勢には日々感心させられております。COVID-19による影響はあったものの、日本に帰国するまでに自分が納得できるまで研究活動を完遂したい所存です。

この度の留学を曾田豊二 SPIO 奨学金でサポートして頂きました国際耳鼻咽喉科振興会に対し厚く御礼申し上げます。留学で得た経験を日本の医療に還元できるよう努力する所存です。どうぞ宜しくお願い申し上げます。



規制緩和時の筆者(左から3人目)およびラボメンバーと Kambayashi 先生(右下)



NJ州からデラウェア川越しに捉えたフィラデルフィア市街を背景に撮影